
東方崩壊録

2Pカラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方崩壊録

【Nコード】

N7672P

【作者名】

2Pカラー

【あらすじ】

気の遠くなるほどの年月が過ぎた幻想郷。二人の少女がある大異変を画策する。

(前書き)

初作品です。至らぬ点等々あるとは思いますが、まったく我慢せず指摘いただければと思います。

「妹紅」

背後から声がかかる。懐かしい声。最近とんと聞かなくなった声。遠い過去には燃えるような想いを抱いていた相手の声。

「妹紅？」

私は振り向かず作業を続ける。

炭焼き。ただ単調な作業に没頭する。気の遠くなる年月繰り返した工程は、おそらく心が壊れても間違えることなどないだろう。

「ねえ？ 妹紅？」

「……なんだよ？ 輝夜」

そう返すだけで喉が痛みを感じた。どうやら私は随分長いこと声を上げずに過ごしていたらしい。

ストン

そんな音を立てて、腰を下ろしたままだった私の背中に重みが加わった。

振り向かなくとも分かる。かつて友となった少女が自分に背中を向けているのが。遠い過去に憎悪を向けた少女が自分に背中を預けているのが。

「今朝、……逝ったわ」

「……そうか」

問答など必要なかった。意思の疎通に言葉を必要とするには、私たちは共にありすぎた。

故に理解してしまう。ああ。また一人、いなくなったのか、と。

パチパチと炭が焼ける音だけが聞こえる。ただ火の揺らめきだけを眺めながら輝夜の言葉を待つ。きつと自分に対して何か言いたいことがあるというわけではないだろうけど、それでも共に居てやることくらいなら出来るのだから。

そして考える。私も、いや、私たちも弱くなってしまったのかな、と。

殺し殺され戦いに己を燃やすのが妖怪の日常だった時代は今や神話の如きはるかな過去。まだ不死となる前の自分ならば、いや、幻想郷という温かな世界に飛び込む前の己ならば、たとえ親しき者の死を聞かされてもここまで心締め付けられることは無かっただろう。それが果たして前進して得た弱さなのか、それとも後退したが故に出来てしまった弱さなのか、そんなことをとりとめもなく考えていると、ようやく輝夜が口を開いた。

「あの子ったらね、最後まで私に謝るのよ？ 顔をくしゃくしゃに歪ませて、ゴメンナサイ、ゴメンナサイって」

「ああ……」

思わず声が漏れた。『彼女』の心を理解してしまったから。

「私はね、笑ってあげることしか出来なかった。大丈夫だからって、そう言っって手を握ってあげることしか出来なかったのよ」

あの日、もう思い起こすことすら困難に思えるほど遙か昔、『彼女』を失った人形遣いの悲しみを、私たちは本当に慰めてあげられたのだろうか。

「それでもあの子は笑ってくれなかったわ。無理してるってのがバレバレだったのかしらね」

あの日、もう振り返ることすらやめた遠い過去、『彼女』を失った吸血鬼の慟哭を、私たちは本当に受け止めていたのだろうか。

「一人にしてゴメンナサイって。永遠亭から兎が消えるわけでもないうつてのに」

あの日、もう辿ることなど出来ない足跡の向こう側、『彼女』を失った賢者の唇から流れた血の意味を、私たちは本当に理解していたのだろうか。

「……永琳が眠った時、私はとても泣いたからね。きっとまた泣くと思っただんでしょね」

あの日、背を預ける少女の従者がその永遠にも似た生を終えたあの日、彼女はソレを知ったのだろう。

「永琳には最後まで心配かけちゃったからさ、次があった時は、そりゃ無い方がいいんだけど、次なんてものが来てまうなら、今度こそ笑って別れようって思ってたのにな」

あの日、私と共に在ってくれた獣人の理解者が眠りについたあの日、私はソレを知ったのだろう。

「……謝るくらいなら逝くんじゃないわよ。バカ鈴仙」

輝夜の声がかすれる。押し殺したすすり泣きと、パチパチと炭の焼ける音だけが竹林に響いていた。

「なあ？ 輝夜」

輝夜のすすり泣く声が止み、さらにしばらくの時を空けてから私は声をかける。

「……あによ？」

鼻にかかる声。そしてごしごしと布で何か - まあ予想はつくが指摘はしないべきだろう - を擦る音が続く。

いつまでも幼さを残す彼女が少し羨ましい。元が人間の私は、永遠なんてものに耐えきれなかったのだから。

「なあ。輝夜」

俯いていた顔を上げる。きっとまだ誰かに見せられるような顔には戻っていないのだろうけれど、それでも力を込めて声を吐き出す。

「なによ？ 妹紅」

凜とした声。背中に広がる温かさが何よりも心強かった。

だから私は言葉を紡ぐ。さあ、一步を踏み出そう、と。

「壊さないか？」

「ハア？」

背中に感じていた重みが消える。こちらを振り向いて眼を見開いている様子が簡単に予想できた。長い付き合いだ。向こうも私の言わんとしていることに気付いたのだろう。

「一応聞くけど、何を壊そうって言うの？」

「一応答えるけど、この楽園をさ」

くつくつと笑いながら輝夜に応える。

訝しげな視線すら感じるが、輝夜はきちんと理解しているだろう。私があくまでも正気であるということは。

そして私もまた正しく理解している。輝夜の答えは『是』以外ありえないと。

「少し、疲れたのさ。それにどうやら」

私の心は壊れてはくれないらしい。

息をのむ声は輝夜に私の言わんとしたことが正しく通じたからだろう。

人の身を外れたとはいえ、永遠は重すぎる。やっと出会えたと思えた理解者たちが次々と欠けていくならばなおさらだ。

「だから、他を壊すの？」

貴方自身が壊れることが出来ないから？

「随分と勝手な話じゃない？」

「元々私らみたいなのは勝手な存在だっただろう？」

月からの追手をかわすために月そのものを隠した輝夜や、ほとんど逆恨みのような形で輝夜との殺し合いを続けていた自分に言う資格は無いだろう？

「ふふつ。確かにね」

首だけで振り向く。輝夜は真っ赤にはらした目を細めながら笑っていた。

「どうせなら派手に行きたいわよね」

「吸血鬼の姉妹でも引きこみに行くか」

今や完全に運命を掌握した吸血鬼の姫や、己の狂気すら支配した

彼女の妹へと会いに赴き、

「亡霊姫はどうだ？」

「庭師の子が代替わりしてから引きこもっているらしいわ。引っ張り出してあげましょう」

死を操る姫君の城へと訪ね、

「酒呑の鬼辺り嬉々としてのって来る気がするわね」

「ああ。暴れる機会なんてこの数千年無かっただろうしな」
鬼を探し山を歩き回り、

「守矢の神々はさすがに無理か？」

「さあ？ とりあえず行ってみましょう？」

二柱の神の祀られる社へと上がり込み、

「天人、ね。あまり気が進まないのだけれど」

「ここまで来て何言ってるんだか」

妖怪の山から有頂天へと至り、

「地霊殿の連中も退屈しているらしい」

「あの酔いどれの情報ってのが不安なだけけれど」

地下の亡霊たちを時に下し、時に無視し、

「命蓮寺って行ったことある？」

「そりゃあな。こんなナリでも長生きしてるもんで」

軽口を叩きながら人と妖怪双方から受け入れられた場へと行きつ
き、

そして彼女たちは集まった。

「……とんでもない連中集めちまったなあ」

そんな言葉が口から零れる。ちらほらと苦笑している奴もいる辺り、自分の認識は間違っていないのだろう。

もとより幻想郷のパワーバランスを担っている絶対強者ばかりなのだ。数名を選び喧嘩させるだけでも幻想郷ごと消し飛びかねない。

「まあ、派手にするには最高の人選よ」

輝夜がそう言って笑う。

確かに。そう呟いて懐からスペルカードを取り出す。

スペルカード。最後に使ったのはどれほど前だろう。本気で幻想郷を破壊するつもりならば、そして何より神隠しの主犯と正面から事を構えるつもりならば、こんな『お遊び』に付き合う必要は無いのだが。

視線を上げれば皆が皆、各々のカードを見つめていた。

あるいは懐かしそうに。あるいは悲しそうに。あるいは切なそうに。あるいは愛おしそうに。

それはかつて自分と対等に『闘う』ことの出来た人間たちがいたことの証明。永遠に取り戻すことの出来ない最愛の人たちとの『日々』の証明。

ならば楽しい楽しい『弾幕ごっこ』を始めよう。それを創り上げたかつての巫女と、それに明け暮れた我らの友に美しい『決闘』を魅せるためにも。

「ご愁傷さまだな。今代の博麗の巫女よ」

少女たちが空へと舞い上がる。数千、数万、あるいは数億の年月を生きた大妖たちが、神々が、笑いながら空を駆ける。

「さて、行こうか。全てを焼き尽くしに」

そう言って私もまた空へと舞った。輝夜が、色褪せてしまった幻想に絶望した仲間たちが待つ漆黒の夜空へと。

c
P
a
r
t
y

)
L
u
n
a
t
i

(後書き)

このような妄想を最後まで読んでいただきありがとうございます
執筆練習のための短編だったんですがどうしてこんな暗い感じにな
っちゃったんでしょうかね

では、別作品でお目にかかれることを願いつつ、オサラバ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672p/>

東方崩壊録

2011年1月27日12時45分発行